

3 Rプラスチック特集 川瀬産業、半導体用容器を再資源化

2025年7月16日

3 Rプラスチック特集（2025年）



川瀬幸久社長

“リサイクルを化学する”を掲げる川瀬産業は、薬品が付着しマテリアルリサイクルが困難な使用済み容器の再資源化を得意とし、薬品プラ容器におけるリサイクル取扱数量日本一を誇る。PEやPPを中心に廃プラを受け入れており、破碎・ペレット化した後、リサイクル原料として販売するほか、一部は成形加工し「リプラギ」のブランド名で販売するなど最終製品まで手掛けている。出口まで責任を持って展開する一方、PEやPP以外にも同業界とのネットワーク網を構築しておりリサイクル処理先を紹介できる同社の信頼は高い。

現在、本社・貝塚工場と静岡工場（磐田市）の2拠点を中心に年間2万トン近くを再資源化。ポリ容器は月間約25万本、ポリドラムは同約2万本に及ぶ。全国の化学・半導体関連会社からの引き合いが急増しており、顧客ニーズへの対応、受入れ体制強化BCP対策も兼ね九州工場（北九州市）と名張工場（三重県名張市）を新たに開設する。九州工場は26年前半、名張工場は27年後半の稼働予定。とくに九州は半導体産業が集積、製造工程で使用された後の薬剤容器のマテリアルリサイクルへの要望に対応することが期待される。これに合わせ10月の九州半導体産業展にも出展する。

静岡工場も強化を図った。10トン車用のスロープが完成し原料投入効率が向上したほか、光学選別機を新た

に設置・稼働した。今後原料の品質向上、付加価値アップにつなげていく。

一方、CO₂排出量削減に向けた取組みも進めており、今年から排出量の可視化と管理が可能なシステムを導入したほか、鉄道貨物輸送によるモーダルシフトも具体的な検討に入っている。

将来的には水平リサイクルも視野に入れている。すでに欧州で進められている取り組みで近年、資源の長期循環として注目を集めている。同社では容器メーカーなどとも連携、事業化を目指す。